編集後記

WASEDA RILAS JOURNAL No.11 をお届けします。

本号は、論文 18 件、研究ノート・翻訳 6 件、特集記事 1 件（第 14 回東アジア人文学フォーラム特集記事）を掲載しています。

昨年度に比べると、論文数が若干減少していますが、これには今年度より実施された査読体制の修正が影響しているかもしれません。

査読誌である本誌は、発刊以来、研究所員の協力のもと厳密な査読が実施されてきました。今回はその査読の書式を一新し、投稿者にご自身の論文のどのような点がどのように評価されているかがより可視化されるようになりました。それに伴い、総評や修正の提案において、これまで以上に具体的に査読者の見解が投稿者に伝わるようになりました。さらに、投稿者が修正に十分な時間が取れるよう、投稿から掲載までのスケジュールも変更しました。

とはいえ、その取り組みがやや性急であったために、査読者および投稿者のみなさんにご不便とご迷惑をおかけすることになったことも事実です。この場を借りて、深くお詫び申し上げます。

そのうえで、今回、本号の準備に携わる過程で感じた課題を二点ほど記します。

ひとつは、本誌の査読者が当研究センターに所属する研究所員に限られていることです。研究所員たちの専門は多岐にわたり、それが深い専門性と領域横断性を兼ね備えた当研究センター、ひいては文学学術院の強みではありますが、投稿される論文の主題はそれ以上に多様です。その論文の価値をより適切に審査・評価することのできる適任の研究者が当研究センターの外にいるのが明らかならば、外部に査読者を求めるということがあって然るべきだと思われます。

もうひとつは、投稿者が学術院専任教員から推薦された者や博士課程在籍者である場合、査読者が投稿者の研究指導者であるケースが生じてしまうことです。実際、この点に関しては、査読依頼の段階で、指導学生の論文を査読するようなケースは避けるべきではないかという意見もありました。

本誌の学術誌としての質をさらに高めていくためにも、この二点について、今後、総合人文科学研究センター運営委員会および文学学術院教授会で引き続き議論を重ねてゆきたいと考えております。

本号の編集は、センター所属の三名の助手（早﨑綾、入倉友紀、村山雄紀）、文学学術院事務所のスタッフ（大山雄一郎）が担当しました。寄稿者、査読者、人文研運営委員会委員をはじめ、刊行にご尽力いただいたすべての方々に、心より感謝申し上げます。

（総合人文科学研究センター副所長　小野正嗣）